



林業でつなぐ未来

町の約9割を占め、優良な四万十ヒノキを育ててきた山林は、先人たちが未来へとつないできた財産です。しかし今、木材価格の低迷により、かつての豊かな山の恩恵が見えなくなったことで、山林への関心が薄れ、手入れされない未整備林が増加しています。

この豊かな山の恵みを未来へつなぐ鍵は、私たち一人一人の「関心」です。

山を守り未来へつなぐ林業従事者の想い、そして山が持つ多面的な機能。それらを守り、生かすことが、安心・安全な未来への「投資」であることを本特集で見つめ直します。

関心の薄れが招く、未整備林の増加

この町の林野面積は約87%を占め、ほんのり桃色で撥水性に優れている四万十ヒノキの産地として、古くから知られてきました。

戦後の大規模な植林から50年以上が経過し、町の山林の多くが伐期を迎える中、戸建て住宅の減少や輸入材の影響などにより木材価格は低迷しています。

その結果、森林整備への関心は薄れ、適正な間伐が停滞する厳しい状況となっています。親世代から引き継いだ山林をどうしたらいいかわからず、「手放したい」という相談があるなど、未整備林が増えつつあります。

この関心の薄れは、町の森林資源の衰退だけでなく、地球温暖化や土砂災害のリスクを招くことから、計画的・継続的な森林整備が喫緊の課題となっています。

官民一体で、未来へつなぐ森づくり

この現状を打開するため、町は動き出しています。低コストで長持ちする「四万十式作業路」を活用し、間伐材をトラックで運び出し、販売して収益を上げる搬出間伐を推進。持続可能な循環型の森づくりは、環境先進企業からも注目され、官民協同で豊かな森づくりを行っています。

さらに、町産材活用への助成や木育事業を推進し、幼少期から木への親しみを育んでいます。また森林環境譲与税も積極的に活用した施策を通じ、森林整備から産業振興、山の多面的機能の向上を図り、町民の安心・安全な暮らしの確保に取り組んでいます。

山を守り

未来を育む

木を伐り、苗を植える未来への投資

この町の広大な森林を、未来へとつなぐ「守り人たち」がいます。彼らは大自然を相手に、20mを超えるヒノキやスギを伐採することもある。40cm位に育ったヒノキの苗を、何万本と植えることもあります。

先人たちが長い歳月をかけ、山を育てた想いを引き継ぎ、次の世代へ安全で豊かな暮らしを届けるため、山を手入れし光を入れます。その強い使命感が、山を守りこの町の未来を導き育んでいます。

守り人たちの未来へつなぐ想い。



窪川林産企業組合
代表理事／横山 真司さん(替坂本)



森杜林産組合
代表／林 幸一さん(大正中津川)



とおわ守人 企業組合
専務／酒井 龍一さん(地吉)

山を守ることは、地域を守ること

昔の人が植林した山を、次の世代が受け継ぐためには、山を健全な状態にすることが大切です。適切に管理することで、山の維持が容易になり、災害リスクも減少します。

20年近く山に携わり、「山の仕事は地域を守ることに繋がっている」と、感じるようになってきました。

だからこそ、山に配慮し丁寧な作業を心掛けています。自信と誇りを持って仕事をしていると言えるように、今後も山と向き合っていきます。

あと3代かける理想の山づくり

自然は嘘をつきません。木は素直で、間伐すればちゃんと育ってくれます。それだけ山には、手入れするだけの価値があります。

私たちの役割は、先祖から受け継いだ山を、次の代、またその次の代へとつなぐことです。

最終的には、針葉樹と広葉樹が混在する昔の天然林に近づきたいです。そのためには10年単位で間伐を続け、あと3代は年月が必要。理想の山をつくる想いを、また次へと託します。

町の暮らしに役立つヒノキに

子どもの誕生を機に、町外での林業経験を地元の山のために役立てたいと思い、戻ってきました。自然相手の厳しい仕事ですが、山を次世代につなぐ再生林に大きなやりがいを感じます。

十数年前に植えたヒノキが、今は自分の身長を超えて育っているのを見ることがうれしくなります。30年後には立派に育って、私たちの暮らしの中で有効に活用されたいですね。

そして身近にある山や木に、関心を持つ人が増えることを願います。

